駒澤地理 No.38 pp.69～86, 2002
Komazawa Geography

ハンガリーの地理学者・首相テレキ・パールに関する研究ノート

水谷 剛

I. はじめに

ハンガリーの地理学界については日本では断片的な情報しかもたらされていないが，ハンガリーにおいては、このテレキ・パールは地理学者としてよりも，激動の両大戦間期にハンガリーの首相を2期も務めた人物として，非常によく知られた存在である。最後にはドイツのナチズムにハンガリーが全面的に加担することに反対をし，自らの命を絶った悲劇の首相としてハンガリー人の心には刻まれてもいる。彼はマジャール王国時代の伝統的な領地であったトランシルバニア公国（現ルーマニア領カルパティア山脈地域）の大土地所有者であった伯爵貴族の子孫である。この土地は第一次世界大戦後のパリ講和会議のトリアノン条約でのハンガリー領土削減修正により，隣国ルーマニアに割譲された。そのためもあり，彼は地理学者としても政治家としても，ハンガリーの領土回復を一つの理念にして生きた。

本稿は，このような彼の生涯を地理思想史の立場からあとづけることを目的としたものである。

II. 地理学者としてのテレキ・パール

テレキ・パールは，1879年にハンガリー王国の首都ブタペストでテレキ・ゲーザ伯爵[1]の息子として生まれた。ずっとブタペストで教育を受け，18歳の時にブタペスト大学に入学し，地理学と政治学を専攻した。地理学の分野では，大学ではローツィー・ラヨシュ[2]やフェルディナント・フォン・リヒトホーフェン[3]などの講義を受けている。特にローツィー・ラヨシュから強い影響を受けた。ローツィーからはアジア地誌を含む各国地誌に関しての教えを受け，またチョルノキー・イェーノ[4]からはアジアの自然地理学について学んだ。1898年には地理学の分野における最初の研究「アジア探検旅行の歴史」[5]をハンガリー地理学協会で報告し，これは翌年『地理学紀要』に発表された。その後テレキは，ブタペスト経済大学の特別聴講生やブタペスト大学の地理学研究所でのローツィーの助手兼研究員などをしながら研究を続け，同時に政治学の分野で1903年に，ピクレール・ギューラ[6]のもとで「太古の国家形成問題について」という博士論題を書き上げ，ブダペスト大学から政治学博士号を取得している。1904年には政

治学の分野で「20世紀の政治人類学」[7] の論文も発表している。その後，地理学の分野においては1906年にハンガリー地理学協会の委員に選ばれ，1907年には，英領エジプト，スーダンなどを旅行した。有名な大土地所有貴族であった彼は当時のハンガリー人にしてはまれな外国への調査旅行も頻繁にすることが可能で，それが彼の研究活動を豊かにした。その後1909年より1923年まで12年間にわたり，ハンガリー地理学研究所の所長を務めた。1908年ジュネーブにおける国際地理学会議で「日本列島の地図作成の歴史」について報告し，これは翌年，ドイツ語とハンガリー語で出版[8] された。テレキがアジアに関心を持ったのは，日本や中国にも調査に行ったことのあるローツィーやチョルノキーの影響によるものと思われる。この研究は主に16，17世紀に日本へ赴いた英，蘭，ポルトガル人などが集めたり，独自に測量して作成した日本列島の地図に関するもので，パリの国立図書館，ロンドン，ウィーン，フィレンツェ，ハーグの図書館で調査したものである。この論文でテレキはパリ地理学協会から権威あるジョマール賞を受賞し，国際的に高い評価をえて，1913年のローマにおける国際地理学会議で古地図研究委員会の委員に選出された。しかし彼自身は，地理学者としても政治家としても日本を訪れることはなかった。1912年にはニューヨークのアメリカ地理学協会の招きで2ヶ月間にわたり，ニューヨークからワシントン，デトロイト，シカゴ，カンザス，デンバー，ソールトレイクシティ，グランドキャニオン，イエローストーン国立公園，サンフランシスコなどを回る画期的な大陸横断学術旅行にハンガリー地理学協会の公式代表団としてチョルノキー・イェーノらと参加し，この時，アメリカ東部地域の経済について地理学的関心からの調査を行なっている。この経験をもとにして1922年にこの調査の研究結果をまとめた「アメリカ経済地理学：北アメリカ，合衆国の特別巡検」[9] が発表された。経済地理学に関しては，それに先立ち「ハンガリーの経済地理学」[10] が1913年にフランス語とハンガリー語で発表されている。

第一次世界大戦中，1916年から1918年までテレキは政府の委嘱を受けて，アカデミー東方調査部を作り，バルカン半島，ウクライナ地域，ブルガリア地域などの地域調査を行なった。この間，1917年にはハンガリー科学アカデミーで「地理思想史」[11] の講演を行い，それを本にまとめて出版した。この本の構成は33章からなっていて，古代から現代までの有名な地理学者，歴史学者，民族学者，人類学者，考古学者，地質学者，経済学者，哲学者を取り上げて彼らの地理思想を考察しながら，テレキ自身の地理学に対する考えやさらに場所についての自分の考えを述べたものである。さらにテレキは場所と人，場所と社会は密接に結びついているものであるとして，フランスの地理学者ヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシュらに対する批判も展開した。この著書はテレキの代表作の一つである。その後，テレキはブタペスト工科大学経済学部で教鞭をとりながら，1917年に「地域と痛み」[12]，1918年に「社会政治と軍隊」[13] という2つの論文を発表している。「地域と痛み」では，それぞれの場所には人々の生活や歴史が深く刻まれており，場所と人の2つの要素を切り離して場所というものを考えることはできないことが主張されている。とりわけ第一次世界大戦の敗色が濃くなった状況下で，ルーマニアに占領さ

れた自分の所領カルパティア地方に住むハンガリー人という具体的な事例を取り上げて，人と場所との密接な結びつきを説明し訴えた。「痛み」とは，カルパティア地方に住むハンガリー人のものであり，同時に彼自身のものでもあった。「社会政治と軍隊」では，戦争で障害を負った兵士や身体障害者のために，政府による福祉施設の設立が重要であることが主張された。後にテレキが首相になったときに，実際に議会でこの公共の福祉の重要性について訴えている。1918年にも戦傷者に対する保護に関する論文「戦傷者の生活に対する保護」[14] をドイツ語で発表している。

同じ1918年，20万分の1縮尺の詳細な当時のハンガリー民族地図を，1920年には詳細なハンガリー民族人口分布地図を完成させた。これはテレキが専門の地理学という学術手段も使って，トリアノン条約での領土修正の不当性を世界に強く訴えようとしたのでもあった。テレキはこの地図を単なる地図ではなく「ハンガリー人の血の通った地図」Carte Rouge と呼び，世界に訴えようとした。同時にこの地図は主題図の表現技術上も斬新な点を多く持っていて注目された。授業においてもテレキは地理学における地図の重要性を非常に強く訴えていたようである。地図のなかった授業は一度もなかったという逸話も残っている。この民族地図により，テレキは政治の世界においても領土修正に貢献する研究者として大きな評価を得ることになった。

1919年にはブタペスト経済大学の教授に任命され，主に政治地理学を教えていた。1922年から1923年までは大学経済学部長などの要職を務めている。ここで経済学部地理学研究所と東洋研究所を作っている。この他に1919年から1938年までエトボーシュ大学の理事も務めていた。その間一時研究を離れて，1920年7月19日から1921年4月14日まで第一次テレキ内閣の首相を務めた。学究生活に戻って，1923年には「ヨーロッパ史におけるハンガリーの発展と位置」[15] をニューヨークで発表した。これはハンガリーのかかえる外交問題，領土問題などをヨーロッパの歴史から考察したものである。あまり知られていなかったハンガリーの問題をこのように地理学の立場から英語で紹介したものとして，アングロサクソンの世界からは高く評価された。同年，バールグハ・ジョールジュとの共著で地理学教育に関する業績である「現代地理学と教育」[16] も発表された。

1924年には，トルコとイラクの国境問題で国際連合国境確定委員の3人の専門家のうちの1人に選ばれている。同年，ハンガリー科学アカデミー社会誌研究所が，1926年にはハンガリー統計協会政治学研究所[17]通称政治学研究所が設立される。どちらもハンガリー民族の正統な領土回復をめざしてテレキによって創設されたものであった。後者はのちにローナイ・アンドラーシ[18]を中心とするテレキの弟子達が活動する場所になった。テレキ自身もこの政治学研究所での活動に力を入れ，彼の指導のもとに中央ヨーロッパの詳細な民族分布図もこの研究所で製作された。また当時の貧困の激しかった農村地域の調査研究にも力を入れ，1936年に5人の研究所員の共著で出版された Elsüllyedit falu a Dunántúlon（ドナウ川以西の沈みゆく村）が

ある。

1925年にはこれまでの功績からハンガリー科学アカデミー名誉会長に選出された。1927年に「経済地理学概論」[19] を発表，後にこの入門編も執筆された。1930年には，「大洋，大陸，地中海と冷帯気候の影響及びヨーロッパにおける山地気候」[20] を助手のナジ・ゾルタンなどと著した。これはテレキによる最初のヨーロッパの自然地理学についての著書である。同じ年に地理学雑誌に恩師についての「ローツィー・ラヨシュ，人物と教授」[21] を執筆した。また同年ドイツ語で「ハンガリーの経済」[22] を発表。1931年から1938年まで *Nouvelle Revue de Hongrie*（新ハンガリー雑誌）と *Hungarian Qurterly* の編集委員長を務める。1931年，政治地理学的な考察である「ヨーロッパの問題」[23] を発表。1933年にはドイツのベルリンにて「中央ヨーロッパの経済」について講演し，また同年，ハンガリー地理学協会より恩師の名前からとったローツィーメダルを授かった。

1934年には「ハンガリーからとヨーロッパから」[24] という題の政治地理学の論文を発表したが，ここでは，当時のヨーロッパの政治問題をヨーロッパ全体とハンガリーの観点から分析し，ハンガリーの政治地理学的に常に不安定な位置と，隣国からの影響をすぐに受け，自主的な行動がとりがたい立場を説明した。ハンガリーの地理学者にはこの著書をテレキの代表作とする人（例えばテレキの高名な弟子であった Fodor Ferenc[25] など）が多い。1934年，ワルシャワでの国際地理学会議にハンガリー地理学協会の代表として出席し，4つの報告を行なった。1935年にはハンガリー地理学協会で「地理学と政治」という講演を行ない，また1936年には，土地と経済の結びつきを中心に論じた経済地理学の入門書「基礎経済地理学Ⅰ，Ⅱ」[26] を，教え子のローナイ・アンドラーシ，コーチ・フェレンツ[27]，カーダール・ラーツロー[28]らと発表した。ヨーロッパ，アメリカ，メソポタミア地域や当時の大英帝国地域の記述などが研究事例としてふんだんに盛り込まれているのが特徴である。テレキの外国好きが表れている著書でもある。さらに同年アメリカのコロンビア大学およびハンガリー国立ブタペスト経済大学経済学部より名誉博士号を授与された。翌年1937年にはルーマニアにおける在外ハンガリー人マイノリティについて論じた論文「一つの民族地図に関して」[29] を英・仏・ハンガリー語の3ケ国語で，ハンガリーの地理学雑誌に発表した。さらに同年，「国家主義と国際主義」[30] を発表。アメリカ，ドイツ，イタリア，アジアでは日本などの世界列強の国家主義と国際主義について論じた。日本についてはサムライ精神が国家主義に結びついていることが指摘されている。1937年から1938年までヨーゼフ・ナーダール技術経済科学大学学長を務める。同年，地域民族研究センターを設立。この後，1939年2月にテレキはハンガリー首相に再び選出されたために学究生活を中断し，再び研究に戻ることはなった。首相在任中の1940年にはハンガリー地理学協会名誉会長に選ばれている。1941年4月3日首相在任中に自室で自殺，享年61歳であった。葬儀には政治関係者から地理学者まで数多くの人が参列した。1941年10月，これまでのテレキの功績からテレキ・パール研究所[31]が設立された。

(1) テレキ・パールが書いた地理学に関する代表的な著書論文一覧

- Atlasz a japáni szigetek kartográfiájának/ Atlas zur Geschichte der Kartographie der Japanischen. 1909（日本列島地図作成の歴史）
- Géographie économique de la Hongrie/Magyar közgazdaság és kultúra. 1913（ハンガリーの経済地理学/ハンガリーの経済と文化）
- A földrajzi gondolat története. 1917（地理思想史）
- Táj és faj. 1917（場所と痛み）
- Amerika gazdasági földrajza, különös tekintettel az Észak-Amerikai Egyesült Államokra. 1922（アメリカ経済地理学：北アメリカ，合衆国の特別巡検）
- The Evolution of Hungary and its Place in European History. 1923（ヨーロッパ史におけるハンガリーの発展と位置について）
- Modern földrajz és oktatása. 1923（現代地理学と教育）
- Általános gazdasági földrajz. 1927（経済地理学概論）
- Óceáni, szárazföldi, mediterran és hidegövi klimahatások és a hegyi klima Európában. 1930（大洋，大陸，地中海と冷帯気候の影響およびヨーロッパにおける山地気候について）
- Ungarns Wirtschaftslage. 1930（ハンガリーの経済）
- Lóczy Lajos, az ember és a professzor. 1930（ローツィー・ラヨシュ，人物と教授）
- Magyarországról és Európáról. 1934（ハンガリーからとヨーロッパから）
- A gazdasági élet földrajyi alapjai. 1936（基礎経済地理学Ⅰ，Ⅱ）
- Egy néprajzi térképről.Földrajzi közlemények. 1937（一つの民族地図に関して）/A propos d'une carte ethnique（民族地図の提案）/Concerning an ethnic map（民族地図に関して）.

(2) テレキ・パールが入会していた学術学会一覧

ハンガリー地理学協会名誉会長(1940)
ハンガリー科学アカデミー名誉会員(1925)
ハンガリー民族学協会名誉会員(1939)
聖イシュトバーンアカデミー会員(1929)
ウイーン地理学協会会員(1916)
ベルリン地理学協会名誉会員(1923)
イタリア王立地理学協会名誉会員(1940)
フィレンツェ地理学協会会員(1937)
マドリード地理学協会会員(1923)
フィンランド地理学協会名誉会員(1938)
ブルガリアソフィア地理学研究所名誉会員(1940)

Ⅲ．政治家としてのテレキ・パール

1．第一次テレキ内閣

第一次世界大戦後のハンガリーは混乱期にあり，政情は不安定であったといえる。戦後すぐに農民労働者勢力を中心としたハンガリー・ソビエト共和国ができたが，これに反対する元ハプスブルグ帝国海軍の提督でもあったハンガリー人，ホルティー・ミクローシュ[32]を中心とする資本家や王国時代の旧大土地所有者貴族などの勢力によって，この政権はすぐに取って変わられた。テレキが首相に任命されたのはまさにこの混乱の時期で，彼はハンガリーでも最も伝統のあるトランシルバニア公国の大土地所有者貴族であり，またハンガリー民族地図などを完成させ，独仏英伊ルーマニア語に堪能な愛国的な学者と考えられ，首相として白羽の矢が立ったのであった。彼は1905年から，文部，国土省関係などの要職をつとめた国会議員であったが，当時これは名誉職のようなもので，積極的に政治活動をしていたわけではなく，むしろ推されて首相についたと考えられる。

この第一次テレキ内閣の時期は，ハンガリーが現在まで抱える大きな問題のもととなったトリアノン条約締結[33]（1920年６月４日）が行なわれた時期であった。彼が後半の人生においてもっとも力を注いだのが，このハンガリーの領土問題であった。彼はこの領土の割譲にもっとも強く反対し，地理学者としてこの地域がハンガリーに帰属すべき正当性を地理学的データや地図を駆使して証明しようと尽力した。トリアノン条約はテレキが首相に就任する前に締結されていたが，領土交渉自体はこれ以後も非公式裏に1922年春まで続けられた。特にテレキ内閣はフランスの後押しによる条約修正を期待し，フランス資本に政府的特権を与えるとなどの提案をし，フランスとの結びつきを強めようとしたが，良い結果は得られず，最終的には交渉から完全に手を引くことになった。テレキは，王位復帰問題や自分の指導力に疑問を感じ，政治手腕があった同じトランシルバニア貴族のベトレン・イシュトバーン伯[34]に譲りわたす形で首相を辞任し，学究生活へと戻った。

2．第二次テレキ内閣

18年後1939年にテレキが政界に戻った時期は，イタリアではファシスト政権が，ドイツではナチス政権が君臨した激動の時代であった。東には社会主義大国ソビエトがあり，ハンガリーが大国の利益とイデオロギーに翻弄された時代でもあった。この時代のハンガリーの最大政治目標はやはりトリアノン条約で失った領土の回復にあったが，イギリス，フランスなどはベルサイユ体制を乱す要素を強く含んだこのハンガリーの領土回復にはまったくの冷淡であり，そのためにハンガリーは，これ以後，ハンガリーに対して領土回復の支持を公式に表明していたイタリア，ドイツに外交的に接近していくという危険な道を歩んでいくことになっていった。

南部国境はムッソリーニのファシストイタリア政権の助けで，北部国境はヒトラーのナチスドイツ政権の助けで領土修正回復しようと試みたのである。テレキが再び首相に選ばれたのは，前政権のあまりにもドイツ従属路線に危機感を感じたハンガリー支配階級による選択であった。テレキはナチズムとはまったく無縁[35]であり，家柄よりくる貴族的世界観を持っていて，同時に領土修正[36]に関しても非常に熱心であったため，ハンガリーの舵取りをする適任な人物として再び首相に選ばれたのであった。この第2期目の首相職も第1期目の場合と同様，テレキ自身が積極的に望んだものではなく，周辺に請われたという側面が強かったのである。

テレキが2期目の首相に再選された最初の年は，ドイツが電撃作戦によりポーランドに侵攻し，第二次世界大戦が本格的に開始された年でもあった。ドイツはすでにオーストリアを併合しており，当時ハンガリーはドイツと国境を接し，ドイツの圧力が直接的にかかる関係にあった。イギリスにナチスドイツからの防衛援助を頼るには，ハンガリーは地理的にあまりに遠く，またドイツにくらべるとずっと小国で力のないハンガリーがドイツを完全に敵に回すことは，チェコスロバキアやポーランドのようにドイツに占領されてしまうという大きな危険をともなうことであった。テレキは政治地理学の観点からこのことをよく認識していたため，彼の基本政策は枢軸国を利用して，領土回復をめざすことを一番の柱に，しかし，西側との断絶を意味するドイツとの完全軍事同盟には反対で，ハンガリーをドイツの戦争マシーン（テレキはドイツのポーランド侵攻におけるハンガリー領通過及び援助をヒトラーに拒否をしている）とせずに，またイギリスなどの西側諸国との関係も崩さずに，ハンガリーのトリアノン条約で失った領土を回復する道を模索するという国益プラス両陣営との関係を維持するという非常に難しい路線であった。ハンガリーでは有名なテレキの2兎を追う政策である。この政策は当時のハンガリーがおかれていた政治地理的状況，国力を十分に検討してたてられた政治地理学者テレキによる綿密な計算にもとづく，当時のハンガリーが取り得る最良の策であったといえる。しかし，このテレキの綿密な戦略も，次第にドイツの快進撃によって勢力を伸ばしたドイツ系少数民族を中心に結成された矢十字党[37]を中心とした親ドイツ派勢力により困難なものになっていった。

テレキ在任中の1940年8月30日，ヒトラーによる第二次ウィーン裁定[38]によりテレキの念願であったルーマニアのトランシルバニア地方[39]の領土が回復された。ミュンヘン協定による第一次ウィーン裁定で，スロバキア方面地域の領土がすでに回復していたが，この第一次ウィーン裁定の時テレキはイムレーディ内閣の文部大臣を務めていて，ウィーンでのこのときの交渉にも実際に現場で携わっていた。したがって，ドイツの恩にハンガリーがますます応えなければならない形となることをテレキは懸念し，この代償が非常に高くつく事をテレキは十分に認識していた。このため，テレキは在任中2度もローマに足を運び，ドイツ一辺倒の力関係をイタリア[40]との関係を強化することによって中和・牽制しようとした。テレキはこれを三国並行軸関係戦略と呼び，ドイツ，イタリア，ハンガリーを同じ力関係でつなごうと考えていたのだっ

た。しかし，これらのテレキの努力も，1941年春，ドイツのユーゴスラビア攻撃におけるドイツ軍のハンガリー領内通過許可，およびセルビアにおけるハンガリーの領土回復（北部セルビアのボイボイナ地方）を約束する条件でのハンガリーのバルカン作戦への参戦で，結局破局へと向かうことになった。テレキはこのヒトラーの要求をのまなければ，ハンガリーはドイツに占領されうる危険があることをイギリス，アメリカ政府にひそかに打診をし，理解を求めようとはかるが，不幸な事にイギリス政府からは完全国交断絶を示唆され，さらに国内のドイツとの軍事的一体化をめざす親ドイツ派勢力も抑えることもできなくなった。彼の両面外交戦略はこのとき，完全に行き詰まった。テレキは万が一の場合はイギリスへの亡命政府も視野に入れていたが，イギリスからの国交断絶の示唆と自分に賛同するものがほとんどいないことに苦悩し，自分の力不足とハンガリーの将来に絶望する。テレキは西側からナチズムに加担する政治家学者と非難されることだけは避けようと，自らの命を絶った[41]のであった。

この後，テレキの願いもむなしく，ハンガリーはナチスドイツと最後まで破局へ向かって行動をともにすることになる。彼はむしろドイツの敗北を予想し，親英派であり，イギリスの首相ロイド・ジョージとは特に親しい間柄でもあった。しかし，白色テロル[42]により共産主義派を数多く殺害したホルティー・ミクローシュの後押しでできた政権の首相を務めることになったため，第二次世界大戦後の社会主義時代には，テレキに対する評価は批判的[43]なものが主流を占めていた。ハンガリーでは冷戦後の現在では歴史上の人物の見直しが非常に盛んであるが，テレキ・パールもその例外ではなく，現在においてはハンガリーの領土回復のために尽くした人物としてハンガリー国内では再評価をされてきている[44]。共産主義時代にはハンガリーでは広場や通り，大学[45]などに共産主義に貢献した人物の名前がつけられていたが，冷戦後は歴史的に活躍した人物の名前に改められている。

第二次世界大戦後のハンガリーは，45年間にわたるソ連による支配という代償と，両大戦間期に取り戻した領土が再びトリアノン条約時の状態にもどってしまうという二つの代償を負うことに結果的にはなってしまった。後者の問題は，ハンガリーの立場からすれば現在も解決されていない。ゆえに，このときハンガリーがテレキを失ったのは非常に大きな損失であったといえる。イギリスのウィンストン・チャーチルは回顧録で，自分はテレキの気持ちを十分理解していたと記しているが，結局，ハンガリーはファシズムと共産主義の蹂躙から逃れることができなかったわけである。ハンガリー動乱でのアメリカの援助が得られなかったこととあわせて，ハンガリーという小国の悲劇的な歴史の１ページをテレキは具現していたといえよう。

第二次テレキ・パール内閣の時の主な出来事

1939年３月15日：ドイツのチェコスロバキア占領政策に参加しハンガリーはカルパティア山脈ルテニア地方（12061 km^2，現ウクライナ西南部の一部地域）を占領し取り戻した。

1939年4月11日：ハンガリー国際連盟から正式に脱退をする。
1939年4月17日：テレキ，チャーキ外相らとローマでムッソリーニ，チアノらと会見。
1939年4月28日：テレキ，チャーキ外相らとベルリンでヒトラーと会見。
1939年7月21日：テレキ，ルーマニアのトランシルバニア地方に視察で赴く。
1940年7月9日：テレキ，会議でミュンヘンに赴く。
1940年3月21日：テレキ，ローマに再び赴きムッソリーニと会見。
1940年8月30日：第二次ウィーン裁定でハンガリーは北部トランシルバニア地方（43104 km^2，現ルーマニア北西部地域）を取り戻す。このときチャーキ外相らとテレキはウィーンで再びヒトラーと会見。
1940年11月20日：第二次ウィーン裁定時の密約から，ウィーンでハンガリーは日独伊三国同盟に正式加盟を決定する。
1940年12月12日：西側へのアピールとしてテレキ，ユーゴスラビアとの間で両国領土問題の放棄を条件に永久友好条約を締結。
1941年4月3日：西側への外交路がたたれ，首相テレキ・パール自殺。

Ⅳ．テレキ・パールの学術以外の活動

その他テレキ・パールは地理学の研究と同じくらいハンガリーのボーイスカウト活動[46]の発展にも力を入れていた。このテレキのハンガリーにおけるボーイスカウトへの貢献はハンガリーでは著名である。ちなみにハンガリーでボーイスカウトができたのは1909年で，初めてテレキがボーイスカウト協会に入ったのは1922年の42歳の時である。その後は1929年までに9つのハンガリーボーイスカウトメンバーや協会の会長にもなって活動を行なっている。また自分が教えていたブタペスト経済大学でも330人もの学生を集めてボーイスカウトグループも作るぐらい積極的であった。これにはボーイスカウトの活動を通じてハンガリーの若者達を教育していこうというテレキの思想があった。ハンガリーは当時ドイツと同じく軍備が制限されていたために，ボーイスカウトを利用して体力や愛国心を養おうとした国家の政策の後押しもあったことも確かである。テレキ自身は在外ハンガリー人との連帯を深め合うために，特に国境外のハンガリー人が多く居住するトランシルバニア地方やスロバキアで率先してキャンプ活動などを行なってもいる。キャンプではボーイスカウトたちに地理学に留まらず文化人類学から動植物学，天文学まで講義するほどの博学さを示したという話も残っている。テレキはまた外国のボーイスカウト協会との交流にも力を入れており，テレキの大のイギリス好きもあって，イギリスとのボーイスカウト協会とは非常に深いつながりを持った。このテレキのハンガリーにおけるボーイスカウトへの貢献から葬儀の時には，ボーイスカウトメンバーによる行進や特別葬儀も行なわれたほどであった。このボーイスカウト協会も共産主義時代にはすべて廃止させられた

が，現在再び西ヨーロッパやアメリカやオーストラリアなどに移住したメンバーなどが中心となってテレキボーイスカウト協会が復活し，世界のハンガリー人コミュニティーを中心に活動がなされている。

他にはテレキは1910年にツラン協会[47]を創設し，1913 年から1916年まで会長を，1916年から1918年まで副会長を務めている。1918年からはツラン協会からハンガリー東洋文化センター[48]と名称が変わり，事務所も国会議事堂内に置かれた。ツラン協会では，世界のツラン民族圏とのつながりを強化する活動が主に行なわれていた。この中には日本も含まれ，ハンガリー民族ユーラシア起源説を唱えていたツラニズム運動においては，フィンランド，トルコと並び日本は非常に大きな位置づけがなされていた。これにはハンガリーにとって脅威であった汎スラヴ主義の牽制およびソ連に対する領土修正同盟の目的が根底にあった。当時は特にチョルノキー・イェーノなどの自然系方面の地理学者たちも数多く関わっていた。テレキは最後まで名誉会長職にいたが，純粋な学術組織ではなかったことと，首相職などの要職が忙しかったため，テレキ自身が積極的に関わったのは創設初期のころだけのようである。テレキ死後も終戦まで活動が行なわれた。ユーラシア，中近東，アジア方面の旅行も数多く行なわれている。戦後はアメリカやオーストラリアに亡命したハンガリー人活動家たちによって，引き続き活動が行なわれた。

(1) テレキ・パールが執筆した政治学方面の代表的な著書，論文

Politikai antropológia, Huszadik Század. 1904（20世紀の政治人類学）. Budapest.

Szociálpolitika és hadigondozás. 1918(社会政治と軍隊). Budapest : Országos Hadigondozo Hivatal.

Die Sicherung der Lebenslage Kriegsbeschädigter. 1918（戦傷者の生活に対する保護）. Budapest : Nemzetvédelem.

Programbeszéde Szegeden. 1919（政策演説）. Budapest.

Nemzet szellem-nemzet kultúra. 1928（国家精神—国の文化）. Budapest.

Az európai probléma. 1931（ヨーロッパの問題）. Budapest.

Traditionelle, freiwillige und Zwangsminderheiten. 1931（伝統，義勇兵，少数民族の抑圧）. Budapest.

Hagyomány és forradalom. 1934（伝統と革命）. Budapest.

Magyarország és az európai politika. 1934（ハンガリーとヨーロッパの政治）. Budapest.

Nationalizmus és internacionalizmus. 1937（国家主義と国際主義）. Budapest.

Beszédek. 1939（演説）. Budapest : Stádium.

Válogatott politikai beszédek és írások. 1939（優れた政治家の演説と文章）. Budapest.

Magyarország az új Európában. 1940（ハンガリーと新しいヨーロッパ）. Budapest : Stádium.

Magyar nemzetiség politika. 1940（ハンガリーの国家政治）. Budapest : Städium.

Szent István birodalma 1941-ben. 1941（聖イシュトバーン帝国）. Budapest : Élet.
Magyar politikai gondolatok. 1941（ハンガリー政治思想）. Budapest : Nemzeti Könyvtár.
Merjünk magyarok lenni. 1943（大胆にハンガリーを行なっていくこと）. Budapest.

(2) テレキ・パールのそれ以外の分野の著書

A Turáni Társaság eddigi és jövendő működése. 1914（ツラン協会のこれまでの活動と将来）. Budapest : Frick Nyomda.

V. おわりに

ハンガリー政府奨学金（2000-2002）を利用してブタペスト大学地域地理学部に研究滞在させていただいているときに初めて知り，そして興味を持ったのが，この地理学者でありハンガリーの首相であったテレキ・パールであった。非常に簡単ではあるが激動の両大戦間期を生きたテレキの生涯と彼の思想をまとめてみたが，テレキの幅広い活動と思想を本格的に考察するためには，さらに一層の研究が必要である。本稿はその予備作業に過ぎず，これからもテレキに関してさらに研究を深化させたい。最後に，彼について書かれたハンガリー語の本，論文（一部英語を含む）は幾多もあるが，代表的なテレキ・パールに関して書かれたものを内容別に紹介をしたい。

文　献

①地理学者を含むテレキ・パールの人生全般について書かれたもの

- Ablonczy Balázs. 2000. *Teleki Pál Élet-Kép Soroyat*（テレキ・パールの人生の軌跡）. Budapest : Elektra Kiadóház.
- Matolay Géza. 1941. *Gróf Teleki Pál élete és működése a magyar revizió szolgálatában*（ハンガリー領土の修正に対するテレキ＝パールの人生と活動）. Budapest : Halász Irodalmi és Könyvkiadóvállalat.
- Németh Gyula. 1941. Gróf Teleki Pál（伯爵テレキ・パール）. *Kőrösi Csoma Társaság*,P8.
- Tilkovszky Loránt. 1969. *Teleki Pál Legenda és valóság*（テレキ・パール，伝説と真実）. Budapest : Kossuth Könyvkiadó.
- Tilkovsyky Loránt. 1974. *Pál Teleki*（1879-1941）. *A Biographical Sketch*（テレキ・パールの伝記）. Budapest : International Publications Service.

②政治家テレキ・パールについて書かれたもの

- Abloczy Baláys. 2000. *Teleki Pál Válogatott Politikai Írások és Besdsédek*（テレキ・パールの選んだ政治著述と話）. Budapest : Osiris Kiadó.
- C. A. Macartney. 1993. *Teleki Pál miniszterelnöksége* 1939-1941（テレキ・パールの首相官邸 1939-1941）. Budapest : Occidental Press.
- Csicsery-Rónay István-Vigh Károly. 1992. *Teleki Pál és kora*（テレキ・パールと大戦初期）. Butapest : Occidental Press.

- Csicsery-Rónay István. 2000. *Teleki Pál*. Budapest : Occidental Press.
- Karsai Elek. 1963. *A Budai Sándor-palotában történt* 1919–1941（ブダのアレクサンダー宮殿の歴史1919–1941）. Budapest.
- Tilkovszky Loránd. 1967. *Revízió és nemzetiségpolitika Magyarországon* 1938–1941（ハンガリーの領土修正と国家政治1938–1941）. Budapest : Akadémai.
- Török Béla. 1972. *Teleki Pál Tragédiája*（テレキ・パールの悲劇）. Sydney.

③テレキ・パールと彼の外交について書かれたもの

- Czettler Antal. 1997. *Teleki Pál és A Magyar Külpolitika 1939–1941*（テレキ・パールとハンガリーの外交 1939–1941）. Budapest : agvető Budapest.
- Juhász Gzula. 1988. *Magyarország külpolitikája 1919–1945*（ハンガリーの外交）. Budapest.
- Juhász Gzula. 1964. *A Teleki-kormány külpolitikája 1939–1941*（テレキ内閣の外交）. Budapest.
- Kis Aladár. 1963. *Magyarország Külpolitikája a második világháború előestéjén*（第二次大戦時のハンガリー外交）. Budapest.

④特にテレキ・パールとトリアノン条約（パリ講和会議）について書かれたもの

- Adám Magda-Cholnoky Győző. 2000. *Trianon. A magyar békeküldöttség tevékenység 1920-ban*（トリアノン，1920年におけるハンガリー講和条約代表団の活動）. Budapest.
- Galántai József. 1990. *A trianon békekötés, 1920. A párizsi meghívástól a ratifikálásig*（トリアノン平和条約，1920。パリ講和会議での批准）. Budapest.
- Galántai József. 1989. *Trianon és a kisebbségvédelem. A kisebbségvédelem nemzetközi jogrendjének kialakítása. 1919–1920*（トリアノンと少数民族の擁護。国際的な少数民族保護に対する法と秩序の形成。1919–1920）. Budapest.
- Gerő András. 1989. *Sorsdöntések*（決定）. Budapest.
- Ormos Mária. 1983. *Padovától Trianonig, 1918–1920*（トリアノンまでの抵抗から）. Budapest.
- Romscis Ignác. 1998. *Trianon és a magyar politikai gondolkodás, 1920–1953*（トリアノンとハンガリーの政治を考える）. Budapest : Tanulmányok.

⑤地理学者が書いたテレキ・パールに関するもの

- Cholnoky Jenő. 1939. Teleki Pál gróf（テレキ・パール伯爵）. *Földrajzi Közlemények* 4（地理学雑誌 4）.
- Cholnoky Jenő. 1943. *Utazásom Amerikába Teleki Pál gróffal*（テレキ・パール伯爵のアメリカ調査旅行）. Budapest : Athenaeum.
- Fodor Ferenc. 1941. *Gróf Teleki Pál emlékezete*（テレキ・パールの記憶）. Budapest.
- Fodor Ferenc. 2001. *Teleki Pál*（テレキの弟子のフォドル=フェレンツによって書かれたテレキの軌跡についての本）. Budapest : Mipo Kft.
- George Kish. 1987. Paul Teleki 1879–1941. *Geographers Biobibliographical Studies Volume* 11. London and New York : Mansell Publishing Limited.
- Hajdú Zoltan. 1991. A geográfus politikus avagy politikus geográfus?-A tudomany és politika kölcsönhatása Teleki Pál életművében（地理学的政治家か政治的地理学者か？一研究と政治の相互作用。テレキ・パールの人生研究において）. *Földrajzi Közlemények*（地理学雑誌），1–2. 1–9. p.
- Hajdú Zoltan. 2000. A magyar földrajztudomány és a trianoni békeszerződés 1918–1920（ハンガリー地理学研究とトリアノン講和条約1918–1920）. *Kisebbségkutatás, 9. évf*（少数民族研究 9 年度版）. No. 224–233.
- Jáki László. 2001. *Teleki Pál, tudóstanárok tanártudósok*（テレキ・パール，学者教育者か教育学者か）. Budapset : Országos Pedagógiai Könyvtár és Múzeum.

- Koch Ferenc. 1956. *Teleki Pál gazdaságföldrajzi munkásságának bírálata*（テレキ・パールの経済地理学に関する論文への批評）. Budapest : Klny.
- Rónai András. 1941. *Teleki Pál.* Budapest : Magyar Szemle.
- Rónai András. 1941. *Teleki Pál, a tudos*（学者テレキ・パール）. Budapest : Pester Lloyd.
- Rónai András. 1989. *Térképezett Történelem*（地図作成者の歴史）. Budapest : Püski Kiadó.

注

（ハンガリー人の姓名は全てそのままの姓，名の順で記してある。ハンガリー語での姓名の語順は日本語と同じである。）

1）Teleki Géza（1844–1913），元ハンガリー王国内務大臣。ハンガリー科学アカデミーメンバー，歴史学協会会長などの活動もしている。敬虔なカトリック家族でテレキ・パールも敬虔な信者となる。テレキ・パールのカトリック信仰活動は著名で，バチカンのローマ教皇とも親しく，協会関係の会長や協会雑誌 *Katholikus Szemle*（カトリック評論）などへも数多く投稿している。彼の思想的基盤となっていた。その他，アフリカケニアのルドルフ湖やエチオピアのステファニア湖を発見し，ガリバルディーやビクトル・ユーゴーとも親しかったおじのテレキ・サミュエル（1845–1916）がいた。テレキが地理学へ進んだのも彼の影響が大きかった。

2）Lócyz Lajos（1849–1920）：地質学出身の著名なハンガリー人地理学者。1900–1914までハンガリー地理学協会会長を務めている。1884年に調査隊長を務めたセーチェニー・ベーラ卿らとハンガリー東アジア学術調査旅行（中国，日本）に参加している。主な著書に A magyar szent korona országaink földrajzi（ハンガリー聖王領地の地理学），társadalomtudomány（社会研究），közművelődési és közgazdasági leírása（文化と経済の記述），いずれも1918. Budapest がある。

3）Ferdinand von Richthofen（1833–1905）：ドイツ人地理学者。ブタペスト大学以外にボン，ライプチヒ，ベルリンの大学でも教鞭をとった。

4）Cholnoky Jenő（1870–1950）：気候学，地形学，水文学を専門とするハンガリー人地理学者1896–1898年に中国と満州を調査旅行している。1914年から終戦までハンガリー地理学協会会長を務める。地理学関係の著書も多い。

5）ハンガリー語の論文でKorszakoko as ázsiai felfedező utazások történetében（アジア旅行探検の歴史）. *Földrajzi Közlemény*（地理学紀要）1899.

6）Pikler Gyula（1864–1937）：ハンガリー人。法律学，社会心理学学者。

7）Teleki Pál. 1904. *Politikai antropológia, Huszadik Század*（20世紀の政治人類学）. Budapest.

8）Teleki Pál. 1909. *Atlasz a japáni szigetek kartográfiájának történetéhez*（日本列島地図作成の歴史アトラス）. Budapest : Hornyánszky/Teleki Pál. 1909. *Atlas zur Geschichte der Kartographie der Japanischen Inseln. Leipzig.* このドイツ語版は日本の地図学史にかんする古典とみなされ，1966年にリプリントされ，日本でも海野一隆などにより数多く引用されている。

9）Teleki Pál. 1922. *Amerika gazdasági földrajza, különös tekintettel az Észak-Amerikai Egyesült Államokra*（アメリカ経済地理学：北アメリカ，合衆国の特別巡検）. Budapest : Centrum.

10）Teleki Pál. 1913. *Géographie économique de la Hongrie/Magyar közgazdaság és kultúra*（ハンガリーの経済地理学/ハンガリーの経済と文化）. Budapest.

11）Teleki Pál. 1996. *Teleki Pál A Földrajzi Gondolat Története*（テレキ・パール　地理思想史1917著）. Budapest : Kossuth. 古代から現代までの地理学者を取り上げて地理学に関するテレキ自身の考えをまとめた本である。この論文でも彼はパリで学術賞を受賞している。この著書は1996年に，Kossuth 出版からハンガリー地理学博物館館長である Dr. Kubassek János の監修で新刊本として再刊されている。

12) Teleki Pál. 1917. *Táj és faj*（地域と痛み）. Budapest.
13) Teleki Pál. 1918. *Szociálpolitika és hadigondozás*（社会政治と軍隊）. Budapest.
14) Teleki Pál. 1918. *Die Sicherung der Lebenslage Kriegsbeschädigter*（戦傷者の生活に対する保護）. Budapest : Nemzetvédelem.
15) Teleki Pál. 1923. *The Evolution of Hungary and its Place in European History*（ヨーロッパ史におけるハンガリーの発展と位置について）. New York : Mcmillan.
16) Teleki Pál, Vargha György. 1923. *Modern földrajz és oktatása*（現代地理学と教育）. Budapest.
17) ハンガリー名 Magyar Statisztikai Társaság Államtudományi Intézet（ハンガリー統計協会政治学研究所）通称政治学研究所は，テレキ・パールによって設立され，テレキ・パールの死後も彼の弟子たちに受け継がれ，正確なハンガリー民族地図，分布図などの詳細な中央ヨーロッパのデータ地図を作り続けることに貢献したハンガリーでは非常に有名な研究所である。ここで作られた地図はパリで行なわれたトリアノン条約でのハンガリーの領土交渉の際に，ハンガリー代表団が提示した公式地図としても実際に使われている。テレキの指導による主なアトラスには英語版の「New World」や「National States and National Minorities」などがある。1945年には戦争中のたいへんな時期ではあったが，テレキ・パールの遺志をついで中央ヨーロッパの自然から人文にわたる411ページにわたる詳細なアトラス「Atlas of Central Europe」をローナイ・アンドラーシらが中心となって作り上げ，英語・ハンガリー語で出版をした。データは1945年当時のままだが，ハンガリーの Püski 出版社から現在でも大判で出版されている有名なアトラスである。この研究所は共産主義時代に政治的理由から廃止された。現在では科学アカデミー地理学研究所の地図部がテレキの活動を引き継いでいるといってよい。
18) Rónai András (1906–1991)：ハンガリー人地理学，地図学者。テレキの招きにより1928年から政治学研究所研究員を務める。1938年から1940年まで同副所長を，1940年から1945年まで同研究所所長を務める。1940年，ブタペスト経済大学で政治地理学を，1941年から1949年までヨーゼフ・ナーダール技術経済科学大学で政治地理学と経済地理学を教える。テレキの死後は彼の後を受け継ぎ，ハンガリー地理学界の指導的存在となる。彼の政治学研究所での地図作成の歴史をまとめた有名な本として，Térképezett Tórténelem（地図作成者の歴史，1993, Püski Kiadó 出版社）がある。当時の詳細な国境外のハンガリー人分布地図とそれに関する詳細な説明などものっている。またテレキのこの研究所での活動や彼の人生についても詳しく書かれている。戦後は1949年に教授職を解任されたが，1950年地質学研究所での職を得て，43歳にして苦労して地質学の学位を取り直す。その後，地質学分野でいくつかの賞も受賞し，80歳まで現役をつとめた。ローナイ自身は1991年まで生きている。
19) Teleki Pál. 1927. *Általános gazdasági földrajz*（経済地理学概論）. Budapest.
20) Teleki Pál, Nagy Yoltan. 1930. *Óceáni, syárazföldi, mediterran és hidegövi klimahatások és a hegyi klima Európában*（大洋，大陸，地中海と冷帯気候影響及びヨーロッパにおける山地気候について）. Budapest.
21) Teleki Pál. 1930. Lóczy Lajos, az ember és a professzor（ローツィー・ラヨシュ，人物と教授）. *Földrajzi Közlemények*, 7–8.
22) Teleki Pál. 1930. *Ungarns Wirtschaftslage*（ハンガリーの経済）. Budapest.
23) Teleki Pál. 1931. *Az európai probléma*（ヨーロッパの問題）. Budapest : Athenaeum.
24) Teleki Pál. 1934. *Magyarországról és Európáról*（ハンガリーからとヨーロッパから）. Budapest : Athenaeum.
25) Fodor Ferenc (1887–1962)：ハンガリー人，地図，地理学者。歴史学も専門にしていた。ブタペスト経済大学，国立経済大学教授。ハンガリー科学アカデミー研究員。戦後も研究活動を続けた。テレキに関する著書（前掲の文献参照）もある。

26) Teleki Pál, Rónai András, Koch Ferenc, Kádár László. 1936. *A gazdasági élet földrajyi alapjai I−II*（基礎経済地理学Ⅰ，Ⅱ）. Budapest : Centrum Kiadó.

27) Koch Ferenc（1901–1974）：ハンガリー人地理学者。1951年ハンガリー科学アカデミー地理学研究所所長。1954年から Eötvös Lóránd 大学地域地理学部学部長を務めた。テレキについて彼が書いた著書に *Teleki Pál gazdaságföldrajizi munkásságának bírálata*（テレキ・パールの経済地理学研究批評）. Budapest : Klny がある。

28) Kádár László（1908– ）：経済地理学部助手，上級講師などを務めるが，テレキを批判し1939年から地域民族研究センターで働く。

29) Teleki Pál. 1937. Egy néprajzi térképről（一つの民族地図に関して）. *Földrajzi közlemények*（地理学雑誌）4–5, 1937. A propos d'une carte ethnique（民族地図の提案）. *Nouvelle Revue de Hongrie*（新ハンガリー雑誌）, 1937. Concerning an ethnic map（民族地図に関して）. *Földrajzi közlemények*（地理学雑誌）.

30) Teleki Pál. 1937. *Nationalizmus és internacionalizmus*（国家主義と国際主義）. Budapest.

31) 政治学研究所，社会誌研究所，地域民族研究センターが共同で Teleki Pál Tudományos Intézet（テレキ・パール科学研究所）別名 Kelet-Európai Tudományos Intézt（東ヨーロッパ科学研究所）を設立し1941年から戦後の共産党政権ができるまでの1949年まで活動を続けた。1947年から1949年まではハンガリー動乱に参加した著名な政治学者ビボー・イシュトバーン（1911–1979）が所長を務めている。

32) Horthy, Miklós（1868–1957）：元ハプスブルグ帝国海軍最後の提督，反革命軍司令官。ハンガリー人。1920年３月1日から1944年10月16日まで国王不在のハンガリー王国の摂政として政界に大きな影響を及ぼした。実質的にこのホルティーの摂政という地位は当時の首相よりも権力を持っていた。議会主義の本質的諸要素は保持していたが，完全な民主的政府ではなかった。最初彼はナチスドイツよりであったが，敗戦色の濃くなった末期はドイツからの離脱を試みるが失敗。ハンガリーはドイツと運命をともにしなければならない状況に追い込まれる。戦後はポルトガルに亡命。ファシストとしての位置づけはされてはいない。Thomas Sakmyster. 2001. *Admirális Fehér Lovon*（白馬の提督）. Budapest : Helikon Universitas に詳しい。外交，政治面でのテレキとの関係については，Mészáros Károly. 1992. *Horthy és Teleki* 1919–1921. Budapest, Neszetor がある。

33) ハンガリー語の新刊本である Romsics Ignác. 2001. *A Trianoni Békeszerződés*（トリアノン講和条約）. Budapest, Osiris Zsebkönyvtár や Romsics Ignác 1999. *Magyarország-Története-AXX. Században*（ハンガリーの20世紀の歴史）. Budapest : Corvina Osiris に詳しく書かれている。

34) Bethlen István（1874–1946）：トランシルバニア公国の大土地所有者貴族，伯爵，政治家。1921, 4, 14–1931, 8, 24まで首相を務める。在任中は経済政治体制固めを行なう。英米との和協を目指した。Romsics Ignác. 2001. *Bethlen István*. Budapest : Osiris に詳しい。

35) ナチズムには反対であったテレキであったが，首相在任中ホルティーによるユダヤ人に対する差別的な政策を批判しなかったとして，ユダヤ系ハンガリー人の間ではテレキに対して批判的な人が多い。特にテレキ在任中にユダヤ人学生制限法などの反ユダヤ法が実際に成立しているため，Antiszemita（反ユダヤ主義者）と定義しているユダヤ人も多い。戦争末期ドイツ占領下のホルティー時代には，ブタペストに派遣されてきたアドルフ・アイヒマンの命令により，1944年５月15日から６月末までの間に当時ハンガリーいた約87万のユダヤ人のうち，国外へ亡命をせずに国内に残っていた47万人が，アウシュビッツに移送され収容所で殺害されている（ホルティーの移送反対により6.5万人はこの時助かっている）。戦後まで生き残ったユダヤ人は，収容所で生き残った数を含めても７万人にしかすぎなかった。しかし経済界や医者，法律家，学者などの主に高専門職を占めていたユダヤ人の排除は，その空白をハンガリー人だけではもはや埋められず，ハンガリーにとっては自らの首をしめることになった。テレキ時代および大戦中のハンガリーにおけるユダヤ人迫害の歴

史についての資料，著書は非常に数多くあるが，代表的なものとして R. L. Braham. 1997. *The Holocaust in Hungary. Fifty Years Later*. Colombia University Press や，Osiris 出版からの新刊本 Komoróczy Géza. 2000. *Holocaust* や Gyurgyák János. 2001. *A Zsidókérdés Magyarországon*（ハンガリーにおけるユダヤ人問題）がある。

36）テレキは1927年に Magyar Reviziós Liga（ハンガリー領土修正連盟）を結成している。

37）矢十字党（Nyilaskereszt Párt）。ハンガリーにおけるドイツのナチスを真似た，当時のハンガリーに居住していたナチスよりのドイツ系少数民族が中心となって結成されたファシスト党。ナチス党と非常に強いつながりをもった。戦争末期はハンガリーにおけるナチスドイツの傀儡政権を担う。ハンガリーの国家主権はその時点で実質的に消滅。ちなみに当時のハンガリーにおける軍の高級将校のほとんどはドイツ系であったため，軍自体もほとんどがナチスドイツよりで，テレキだけではこれら親ナチスドイツ派勢力を結局抑えることができなくなっていた。

38）テレキ・パールのこのときの外交活動については Kis Aladár. 1962. *Magyarország külpolitikája a II. világháború időszakában 1939–1940*（第二次世界大戦中のハンガリーの外交1939–1940）. Budapest. が詳しい。

39）この地域に住むハンガリー人について扱った本として，Kocsis Károly, Kocsisné Hodosi Esyter. 1991. *Magyarok a határainkon túl–A Kárpát-medencében*（国境外カルパティア盆地におけるハンガリー人）. Budapest が詳しい。このカルパティア山脈地域（現在ルーマニア領）はハンガリー王国時代トランシルバニア公国と呼ばれ，ドラキュラ伯爵の伝説でも有名な場所である。ここは国境外に住むハンガリー人の数が最大の地域でもある。その数現在約200万と推定されている。またこの地域はアメリカへのハンガリー人移民を数多く輩出した地域でもある。彼らは雇用を求め，主に商業都市ニューヨークと工業都市オハイオ州クリーブランドに，カナダではオンタリオ州トロントに多く移住した。これらはアメリカ，カナダの中でもハンガリー系民が現在でも非常に多く住む都市である。

40）テレキ時代のイタリアとハンガリーの外交関係については，Réti György. 1998. *Budapest–Róma Berlin Aranyékában Magyar-Olasz Diplomáciai Kapcsolatok* 1932–1940（ブダペスト–ローマ，ベルリンの陰において　ハンガリーの外交的結びつき1932–1940）. Budapest : ELTE Eötvos Kiado に非常に詳しい。

41）テレキの死は手記を残していることから公式には自殺ということになっているが，握られていた拳銃が左手であったことなどの不可解な部分も多く，矢十字党員に殺害されたという説もある。テレキの死を扱った科学アカデミー歴史学研究員による著書 Tilkovszky Loránt. 1989. *Teleki Pál titokzatos halála*（テレキ・パール自殺の謎）. Budapest がある。

42）ホルティー・ミクローシュがハンガリー・ソビエト共和国を支持した人々を政治的，文化的に軍事力を使ってパージした行為を主にいう。逆に革命側の行為は赤色テロルという。

43）一例として共産主義時代に科学アカデミー歴史学研究所から英語版で出版された，当時のアカデミー歴史部門研究員7人によって編纂された A Histrory of Hungary, 1973 では，ブルジョワ政権に加担した人物として批判的に政治家テレキ・パールが描かれている。

44）新しく2000年に出版された新刊書 Teleki Pál Élet-Kép Sorozat（テレキ・パールの人生の軌跡）ではテレキ・パールを領土回復のために尽くした人物として肯定的に評価をしている。ちなみにテレキの弟子であった Fodor Ferenc が2001年に出版した Teleki Pál は，カーダール共産党政権時代にすでに書かれていたが，検閲にあい出版をみ合わせた本でもある。これらは冷戦後の政治家テレキ・パールに対する見方の変化の特徴といえる。

45）一例として，ブタペスト市内のスターリン通りはハンガリー王国時代に活躍した貴族であるアンドラーシ伯爵の名前を取ってアンドラーシ通りとなり，ブタペストカール・マルクス大学は旧名のブタペスト経済大学に改められたりしている。国会議事堂の近くに戦前はテレキ・パール通りが存在した。まだ復活はしていないがあちこちでこのように名称変更復活が起こっていることから近い

将来テレキ通りも復活すると思われる。

46) テレキのボーイスカウト活動を扱った著書に Bodnár Gábor. 1989. *A Magyarországi cserkészet története*（ハンガリーのボーイスカウトの歴史）. Budapest がある。

47) ツラン協会（Turáni Társaság），別名ハンガリー・アジア協会（Magyar Ázsiai Társaság）と呼ばれた。ツラン協会機関誌 *Turán* を毎年発行する。地理学者に限らず，ツラニズム運動に共鳴する知識，貴族階級，政治家などが集まって活動が行なわれていた。このなかにはテレキの恩師であったローツィー・ラヨシュやアジア学術調査隊長を務めたセーチェニー・ベーラ卿（1910年から1913年まで会長），1918年に反革命政府の国家評議会大統領を務めたカーロリ・ミハーリー卿たちもいた。パトロンはハプスブルグ帝国皇帝フランツ・ヨーゼフの皇太子が務めていた。この協会は戦前のハンガリーツラニズム運動の中心的場となった。ハンガリーのツラニズム組織としてこの協会以外に，ハンガリー・ツラン同盟（Magyar Turán Szövetség）が1920年頃に創設されている。一方，日本の方でも，ツラン民族同盟（1921年），日本ツラン協会（1930年代初），日洪文化協会（1938年）が存在した。ツラニズム運動を扱った著書，雑誌として，今岡十一郎の「ツラン民族圏」（龍吟社，1942年），「ツラン民族運動とは何か―吾等と血をひくハンガリー―」（日本ツラン協会，1933年），「洪牙利より觀たる汎スラヴ主義と汎ゲルマン主義」（日洪文化協会，1944年）や，家田修「日本におけるツラニズム」（日本東欧関係研究会編，1982年）などがある。

48) ハンガリー東洋文化センター（A Magyar Keleti Kultúrközpont）

Komazawa Geography, No.38, pp.65–82, 2002

Some Biobibliographical Notes on Teleki Pál (1879-1941), Hungarian Geographer-Politician

Tsuyoshi Mizutani*

This paper was written to introduce in Japan Teleki Pál, who is little known in this country except to a small number of specialists in the history of cartography. In the first part, the author discusses the important role Teleki Pál played in the formation of modern academic Hungarian geography, focussing on his main works, including those on the history of the cartography of the Japanese archipelago, the history of geographical thought and the elaboration of the ethnographic map of Hungary. In the second part, the author focuses on the political activities of Teleki Pál, which ultimately led to his tragic end by suicide in the course of his opposition as prime minister to the pro-Nazi trends during World War II.

As a geographer he attached great importance to cartography, but at the same time he was greatly preoccupied by the problem of Hungarian minorities in Transylvania, where his dukedom was located, and the territory of which passed to Rumania under the Paris Peace Treaty after World War I. Where these matters were concerned, his political geographical interests and his activities as a politician to revise Hungarian territorial problems were in a certain sense parallel. In this respect, his 1923 work "The Evolution of Hungary and Its Place in European History" is very important.

The author wishes to express his appreciation to the Ministry of Education of Hungary for its grant of a scholarship and to the Department of Geography at Budapest University for its academic assistance in the work of research for this paper.

*Graduate Student, Department of Regional Geography, University of Budapest (ELTE), Budapest, Hungary